起源の主張

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起源の主張

【Ｎコード】

Ｎ８３８６Ｉ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

火山国は他の国の文化の起源は自分達にあるとばかり主張していた。そうした主張をしているうちに周辺諸国は呆れ遂には恐ろしい国を怒らせて。所謂風刺ものです。

第一章

起源の主張

火山国は不思議な国だった。何かというと他の国のものを羨ましがるのだ。

「あの国のものがいい」

「その国のものは素晴らしい」

常に他の国、とりわけ隣の島国である森山国のものを羨ましがる傾向があった。それで何かというと森山国からはじまったものを自分の国のものだと吹聴していた。

「あの国の剣術は我が国が起源なのだ」

「お茶の飲み方も我が国が起源だ」

こんなことをいつも言っていた。最初森山国の人々は彼等が何を言っているのか全くわからなかった。とりわけ剣術に関することはそうだった。

「この剣術は我が国独自のものだというのに」

「何故あんなことを言うのだろう」

とりわけその剣術を嗜んでいる人々が首を傾げる話であった。何しろ彼等の剣術というのは一本の刀を両手で操り身体を正面に向ける独特のものだ。それに対して火山国の剣術は片手に剣を持ちもう一方に盾を持って守りながら戦う。戦い方がまるで違うのだ。

しかしそれでも彼等は言うのである。森山国の剣術は自分達が起源であると。

「現にこの本に書かれてある」

「あの国の格闘術の多くも我が国が起源だと書かれている」

こう主張するのである。

「だからあの剣術は我が国が起源なのだ」

「これは間違いないことだ」

「いや、それは違う」

「絶対に違う」
森山国の剣術家達は彼等の主張に対して首を傾げさせたまま反論した。
「そもそも我が国の剣術は古来の戦よりはじまって」
「片刃の細長いあの刀を両手で持ち」
「そしてそれを示す資料としては」
こと細かにありとあらゆる部分まで説明してみせる。これで話は決まったかと思われたがそれでも火山国の人達は言うのであった。
「しかし我が国が起源であることは疑いようがない」
「そう、その他にもだ」
しかもまだ起源があるというのである。今度の起源は。
「あの国の国花にしろだ」
「我が国が起源だ」
今度は花がそうだというのである。
「あの花で一番有名な種類のものは我が国のある島からのものだ」
「その証拠がちゃんとある」
「いや、それもまた違う」
今回も森山国から反論が出て来た。
「あの種類は掛け合わせて作られるもので寿命もそれ程長くはない」
「それで何故貴国のその島にあるのか」
こう反論が為されるのであった。
「しかも貴国の国花は別の花だが」
「何故その花を言わないのか」
森山国の人々はそのことも不思議で仕方ならなかった。自分達の国花の起源があるのだという主張がどうしても理解できなかったのである。
「彼等の主張はおかしいのではないのか」
「妙ではないのか」
やがて森山国の人達はこう思うようになった。
「何故あんなことを言うのか」

「何かあるのだろうか」
あまりにも起源を主張されてこう思うようになったのである。しかも火山国が起源を主張する相手は彼等森山国に対してだけではなかったのだ。
火山国の隣にある古来からの大国である川山国がある。幾つもの大河を持つこの国は火山国との交流が長い。今度はこの国のものも起源だと言い出したのである。
「あの国の文字はそもそも我が国が起源であり」
「かつて彼等の国は我々が治めていた関係で」
「そんな筈がない」
「そんな過去はなかった」
今度はその川山国から反論が返って来た。
「我が国のあの文字は長い歴史を経て骨に書かれた文字や動物の形をした文字が形を変えて今の形になっていったものである」
「我が国が紀元前に統一された時にまとめられたものだ」
ここで歴史を出すのが川山国の人達であった。
「それで何故火山国に起源があるというのか」
「全く出鱈目な主張だ」
「しかもだ」
彼等の反論は続く。
「我が国の四千年の歴史の中で火山国の民族が入って来たことは一度もない」
「それは歴史書にはっきりと書かれている」
彼等は歴史を出して反論する。しかしここでも火山国の人達はその反論を聞くことなくさらにはこんなことまで言い出したのである。

第二章

「あの大思想家もまた我が国の人間だ」
「これも間違いない」
「いや、それも間違いだ」
「それもはっきりしている」
今度は森山国の歴史に残る偉大な思想家を自分達の民族の生まれだと主張してきたのである。しかしこれもすぐに川山国から反論が来た。
「歴史書に彼の出生ははっきりと書かれているが」
「我が国の民族で間違いない」
「出鱈目に過ぎない」
こう論破されたのだがやはり彼等の耳に届くことはなかった。川山国の反論に耳を貸すことはなく彼等は今度は東の海の向こうにある新たな大国開山国のことについても言い出したのである。
「あの国の言葉の語源は我が国の言葉であり」
「そしてあの国の先住民達は我々をルーツに持っている」
こう主張したのである。開山国の人達もまた最初は何を言っているのかわからなかったがこのことにすぐに反論してみせたのであった。
「我が国の言葉は移民する前にいた国の言葉だ」
「その国の言葉の元は古代の帝国の言語や常に争っている国の言葉が混ざったもので」
彼等もまた歴史を出して反論する。
「そんなことは有り得ないことだ」
「何故遠く離れた貴国の言葉が元になっているのか」
彼等もまた言っていく。
「しかも先住民は何時何処から来たのかもある程度わかっているが」
「貴国の民族が来たという話は有り得ないものだ」

今度はその来たという時代の地図まで出してそれで検証し反論する彼等であった。見れば火山国から開山国に入るまでには北極からぐるりと回らなくてはならずとても無理のあるルートだったのだ。
「しかも我が国の黒人だけでなくあらゆる人種も起源は自分達と言うが」
「黒人はそもそも人類で一番古い人種だ」
彼等の今度の根拠は人類がアフリカ南部から出て来たことにある。このこともこうして論破されるがやはりそれに対する具体的な反論はないのであった。
こうやって三国にありとあらゆる起源を主張していくがここでまたしても森山国に対して起源を主張するのであった。今度の起源は。
「あの国の帝の起源は我々だ」
「我々にあるのだ」
こう言い出したのである。
「我が国の民族の血が入っている」
「だからこそ我々の国の人間だ」
「またおかしなことを言うな」
「全くだ」
森山国の人々もいい加減慣れてきていて首を傾げながらまずはこう彼等の中だけで言い合うのだった。
「帝は既に神話の頃からおられるのに」
「神話でなくともあの国にルーツがある貴族が入って来る前におられた」
「何処に根拠があるんだ？」
こう言っていぶかしんでいるとであった。彼等はさらに主張してきたのである。
「あの帝の母が我等の民族だった」
「だから我等の血が入っているのだ」
「だからこそ起源は我々にあるのだ」
血縁だからだというのである。千二百年は前の帝の話である。

森山国の人達はこの首長にも首を傾げた。呆れもしていた。何しろ千二百年も前の帝である。そもそもその帝の系列が今の帝の系列かということすら容易にはわからない状況である。それで森山国の人達はまず自分達のその帝のルーツを勉強しなおすことになった。

「今の帝は北朝だったよな」

「だよな。南北に別れた時にな」

既にここでかなり複雑なことになっていたがそこからも学ばれるのであった。

「まあそれもあったし」

「しかもな」

この国の帝室の系譜はかなり複雑なものがあった。長い歴史を持っていれば系譜もまた非常に複雑なものになることも当然のことである。

「しょっちゅう代替わりとかしてるしな」

「直系とか。あやふやなところあるな」

「まるで迷路みたいだな」

まさに迷路の如き系譜を見て話すのだった。

「それでも。その帝の母上があの国の方だとしたら」

「まずそこで血が半分だよな」

父と母で半分ずつである。血とはそういうものだ。

第三章

「それで帝が結婚されて皇子にはさらに半分になって」
「次の代でまた半分になって」
「その次でまた半分になってくな」
実際に系譜を見ながら検証が進んでいく。
「何だよ、今全然っていってもないぞ」
「ああ。こんなので向こうの人って言えるか！？」
「渡来とかだったら誰だってそうだろ」
こう話されていくのだった。実際に森林国は火山国から多くの渡来人が来ている歴史がある。今も様々な事情から移り住んでいる所謂在森火山人という人々がいる。
「こんなので火山人か」
「それだったら俺も火山人だよな」
「いや、今も言い出してるだろ」
こういった話もされるのだった。実際に火山国はそうした主張も世界中にしていて呆れられてもいる。だから川山国の思想家も火山国の民族の人間だと言えるのだ。
「だからな。奴等は」
「本当に何考えてるんだ？」
「わかるか、そんなの」
こんなふうにも言われるのだった。
「まあとにかく帝室は火山人じゃないな」
「今上陛下の所縁があるっていう御言葉から言い出したんだよな」
「だったな、確か」
実ははじまりはそれからだったのだ。リップサービスと考えるのが普通だが火山国の人間はそうしたふうには受け取らなかったのである。
「それはな」

「やれやれだな」
「まあこれで反論はできるな」
「そうだな」
そんな話をする。そうしてすぐに反論を出す。しかしこれもまた彼等の耳には入らなかった。そして今度はこんなことを言うのであった。
「あの体術もまた我が国起源だ」
「印山国のあの体術もだ」
今度は川山国の南西にあるこれまた長い歴史と独自の文明を持っている国のものを自分達の起源だと言い出したのだ。今度はそこだった。
「あれはそもそも我が国に起源があり」
「その根拠は」
「ないよ」
印山国の人々はこれまでの三国よりもきつかった。
「そんなものないよ」
「あったら出して欲しいものだ」
「さあ出してみろ」
こう言うがであった。相変わらずの対応の彼等であった。誰にでもすぐにわかるような嘘を出してすぐに否定された。しかしそれを認めない。
そうしてその出鱈目な主張を繰り返す。印山国の人々も完全に呆れ返った。そして遂にはこう言って匙を投げてしまったのである。
「駄目だあれは」
「何を言ってもな」
「そうだな。駄目だ」
まさに駄目出しであった。
「ああいう連中だな」
「そう思ってな。相手をしていくか」
こう断定したのは彼等だけではなかった。他の三国もだ。彼等の

目は生暖かいものになった。しかし火山国の者達は相変わらず起源の主張を続ける。
「欧山のあの帝国の起源は我々にあって」
「そしてあのサッカー選手のルーツは我々にある」
こうした主張を延々と続けるのだった。最早誰も相手にしていないというのにだ。彼等はそれを何時までも何時までも続けるのだった。

起源の主張　　完

２００９・９・１７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8386i/

起源の主張

2010年10月8日15時26分発行